令和７年度　福井県立嶺南西特別支援学校　学校関係者評価書

（問）
（１）「具体的取組」の項目は妥当か。
（２）本校教員は「成果と課題」を適切に把握しているか。
（３）「改善策・向上策」は実効性のあるものか。

（意見を聞いた方）
藤田　盛一　氏（若狭ものづくり美学舎　管理者　　福井県立美方高等学校　元校長）
村上　美恵子 氏（ＮＰＯ法人福祉ネットこうえん会　相談支援センター若狭ねっと　管理者）
岡本　元宏　氏（福井県立嶺南西特別支援学校　ＰＴＡ会長）

教育課程 学習支援 研究研修	（１）小学部から中学部への繋がりや高等部卒業後を考えた設定等妥当である。障がいの特性が個々に違うので，教育的ニーズも個々で異なってくる。「個」の違いを前提に据えた授業実践は的確と考える。 （２）把握できていると考える。一人一人の特性を理解し向き合っていこうという姿勢が感じられる。子供の内面を的確に捉えることは難しいので，引き続き研究研修に努めていただきたい。特別支援学校では，一人一人に合わせた授業が実践されていると思うが，そう感じていない方が一人でもいるということをしっかり受け止めていただきたい。 （３）実効性あり。障がい特性や程度に応じた個別の指導計画に基づき，子供の成長ペースに合わせて授業を進めていくことは，子供の内面に負担を生じさせない学習支援に繋がると考える。個別の教育支援計画・指導計画→教員間の共通理解→授業計画・展開という一連の流れが意識され，システム化されていてよい。
教育課程 学習支援 研究研修 小学部	（１）妥当である。自ら行動することも大切だが，その前段階の「自分で決める・選ぶ（人に頼ることも含めて）」力，そのための体験・経験をしっかり積み重ねて欲しい。 （２）把握できていると考える。小学部は，色々なことに興味や関心を示し，自主性の萌芽が見られる年頃なので，それを引き出す取組は評価できる。アンケートという主観に基づいたもの以外に子供達の成長を測れる指標があるとよいと思う。 （３）保護者，教職員ともに 100%の評価であり，今年度の取組継続をベースに引き続き改善・向上に努めていただきたい。学習内容や支援方法の見直しの具体的な例があるとなおよいと考える。一人一人の特性や実態については，保護者だけではなく放デイ等の関係機関からの視点も大切だと思う。
教育課程 学習支援 研究研修 中学部	（１）妥当である。 （２）保護者，教職員ともに目標指数をクリアしたものの，両者の間で僅かではあるがギャップが生じている。しかし，そのギャップを埋める改善策・向上策を検討しており，課題については把握できていると考える。 （３）保護者の意見を踏まえた改善策の検討，保護者との連携強化により，子供ファーストの支援が行なわれると期待できる。しかし，保護者と教職員との連携強化の中で，子供の気持ちが置き去りになることがないように注意して取り組んでいただきたい。関係機関と連携をとることで，色々な視点からアセスメントでき，支援の質の向上につながると思う。保護者の意見について，即時に学部会で情報共有することについて，修正・柔軟性という点で非常に大切であると考える。
教育課程 学習支援 研究研修 高等部	（１）妥当である。 （２）把握できていると考える。授業の中で個人の考えを発表することは，社会に出てから自分の思いや意見を伝える自信をもつことに繋がるものである。また，ICT を活用できるようになれば，生活の色々な局面で役に立つことにもなるので，子供の特性を踏まえながら積極的に授業に取り入れていただきたい。“卒業後の進路を見据えながら”ということが非常に重要である。卒業までに身に付けたい力や課題について生徒とともに確認し，個々に応じた具体的取組を実施できたことが，100%の評価に繋がった。 （３）自らの意思で発表できる子供にはその力を伸ばす工夫を，自ら伝えることが困難な子供には口頭以外で考えや思いを伝える力を伸ばす工夫を，引き続き検討・実践していってもらいたい。 ICT 機器の活用はこれからの時代必須である。情報を得るだけではなく，コミュニケーション手段等，生活の中の様々な場面に活用できるようになってほしい。
生徒支援	（１）妥当である。 （２）いじめ事案の早期確認から，早期対応・解決がはかられたことは，組織力として評価できる。いじめの解消だけではなく，SOS の出し方や逃げ方等，身を守る方法も同時に教えていただけるとよいと思う。児童生徒会だよりは，子供たちからの発信ということで，保護者には興味深いものであり，実際に高い評価を得ている。それがまた子供たちの自信に繋がる好循環となっていくと考える。人間関係のトラブルがないか教職員で共有し，早期に解決を図っていることは評価できる。子供たちの様子に小さな変化でも見られる時は情報として共有し，引き続きトラブルの未然防止に努めていただきたい。 （３）体育大会の体育館開催は，保護者の満足度は高いが，子供たちはどう感じていたのか。その点も考慮した上での計画であることが分かるとよい。人間関係のトラブルの原因が家庭生活にあることも想定されるので，教職員と保護者が情報を共有することは重要と考える。連絡帳などを有効に活用していただきたい。安易な SNS の利用によるトラブルに巻き込まれないように，学校においても SNS の危険性について引き続き指導していただきたい。また，保護者の意見にあるように体育祭で，重心の子供も場にいるだけではなく，「参加」できる配慮が必要である。
進路支援	（１）妥当である。“個々の目標に応じた実習”支援は，大変重要だと思う。 （２）現場実習における新しい運用方法の実践や就労選択支援サービス等の新しい福祉サービスに関する情報提供は，不安を和らげる効果が期待できるよい取組であると考える。また，事業所の見学会は進路先を知る上で有意義な企画であるので，事業所の協力を得ながら，これからも継続して実施していただきたい。 （３）特に重心や医ケアが必要なお子さんについて，見学と現場実習は違うと思うので，卒業後の通所が現実的ではない施設での現場実習ではなく，しっかりと卒業後の生活全体を見据えた現場実習にして欲しい。そのためには，関係機関との連携が必要である。進路先に関する情報や福祉制度やサービスに関する情報は，保護者にとって必要なものであり，引き続き積極的な情報提供を早い段階（小・中の頃）からお願いしたい。また，生活介護事業所の受け入れが厳しいというような負の情報については，事業所側からの情報提供にも期待したいので，事業所から現状説明を受けられる機会を増やしていって欲しい。
保健管理	（１）妥当である。“日常生活での習慣化の取組”，習慣化ということが重要である。 （２）把握できていると考える。日常的な健康観察に加え，楽メを利用したインフルエンザ等の感染症に関する情報提供もあり，保健安全管理に対する意識は向上していると考える。避難訓練は子供に災害への備えを意識させるには効果的な取組と考える。食育については，地場産物の活用にとどまらず，毎日の献立にイベント的な意味を持たせる工夫もあり，子供だけでなく教職員にも満足できるものであったと考える。 （３）保健安全管理についての意識の向上と習慣化は，卒業後の生活に向けてとても大切なことなので，学校と家庭だけではなく，放デイ等の関係機関ともその方法や取組を共有していただきたい。また，実際は子供の受け渡しが大きな問題になってくるので，保護者と連携して検討を重ねていただきたい。 給食により，食材など食に関する知識習得や手洗い・歯磨きなど衛生面の習慣を身に付けることが期待できる。地場産物の活用は地元貢献になるのでこれからも長く継続していただきたい。
ＰＴＡ連携	（１）妥当である。 （２）把握できていると考える。子供が参加できるレクリエーション的な企画に多数の方の参加があったのは評価できる。北知Ｐの講演会への参加をオープンにしたのは新しい試みであったが，参加者が少なかったのは残念な結果であった。PTA 広報誌の制作は，保護者が子供たちの学校での様子を知ることができ，よい活動であると考える。特に本年度は，現場実習の特集記事が掲載され，保護者が卒業後の進路をイメージするのに効果的であった。制服・体操服譲渡会は今の時代に合うよい取組だと思う。 （３）仕事や育児などがあり，子供の障がいの特性も一人一人違う中で，保護者の PTA 活動への参加を高めていくのは難しいことである。色々な機会を捉えて保護者同士の繋がりが強まる工夫を，PTA 役員と一緒に検討していっていただきたい。PTA 広報委員会と連携し，引き続き制作に取り組んでいただきたい。また一方で，教職員に過度な負担がかからないような工夫についても並行して検討をしていただきたい。
総評	・インクルーシブ，共生，SDGｓなどが唱えられるが，支援学校の役割は大きいのではないか。地域や一般社会に対して，啓蒙や情報発信等，社会を動かす側の立場としてアプローチが求められていると思う。 ・地域に受け入れられるという面と地域を受け入れるという面と，両方あると考える。学校開放・見学，説明会，特定の団体（民生委員等）を招いての説明会等，無理のない範囲で実現できればよいと考える。 ・子供たちの発達段階ごとに求められる能力・スキル，学校として求められる能力・スキルがある。それを達成するための授業や行事などの取組があり，それをよりよく達成するため創意工夫が行われる。育てる・身に付ける能力の到達度を評価するという観点と，取組の方法・手段への評価と，目標設定と評価に二面性があるのでないか。 ・以前と違い，障がい特性や発達特性について，またその支援について様々な研究がなされ，この地域にも高い専門性を持った人がたくさんいる。教育的な視点，福祉的な視点それぞれの視点を有機的に活用することで，より充実した生活への支援ができると考える。 ・教職員同士，教職員と保護者との情報共有と連携が，様々な困難な問題の解決に繋がっている。このような情報共有と連携をますます強化していくことが，困難な問題の未然防止に有効に機能する。 ・アンケートの結果を取りまとめた学校評価書に対して，保護者全員に改めて意見や感想を求める機会があってもよいと思う。具体的な資料に基づき意見や感想を求められることで，保護者にとっても具体的に答えやすい状況となり，幅広く意見や感想を収集できると考える。
学校関係者評価を踏まえた今後について	・評価者の方々からいただいた評価や意見等を教員全体でしっかりと共通理解し，次年度のスクールプランをはじめ学校経営に確実に反映させる。 ・教員の協力と協働により，専門性の向上をはじめ教育機能の充実に一層力を入れ，保護者や地域住民等からの信頼と期待にしっかりと応えていく。